

## 樋口一葉「ゆく雲」論

― 桂次の物語に見る日清戦争後への予感 ―

## 塚 本 章 子

## はじめに

「ゆく雲」(明二八・五『太陽』)は、不明瞭な印象が強く、樋口一葉の小説のなかではあまり高い評価を得られていない。だが、これまで主人公のお縫を中心に詳細な研究がおこなわれ、理解は深まってきた。例えば、菅聡子氏は、「ゆく雲」に描かれた「手紙」に注目し、「桂次に手紙を〈書く〉という行為は、お縫にとって初めて自らと向きあい(略)自己を語るという行為を意味した。」と指摘している。また峯村至津子氏は、「縫うこと」に女大学的な女性像を見、一見それに沿うようなお縫の姿を指摘した上で、「冷やか」で「岩木のやうな」お縫とは、彼女の意志と努力によって作りあげられた第二の自己だった」と述べる。そして「ほころびが切れ」ることは、その自己が「破綻」し「本来の」お縫が「頭をもたげてくることを意味する」と述べている。このようにお縫について

の理解は深まっている。だが「ゆく雲」は、まだどこか捉えきれないように感じられる。それは山本欣司氏の指摘にもあるように、もう一人の主人公ともいえる桂次をどう読むかという問題に関わっている。

この小説は桂次の視点に添って始まり、その後も桂次をお縫と同等かむしろそれ以上に詳細に描き込んでいる。冒頭を見よう。

酒折の宮、山梨の岡、塩山、裂石、さし手の名も都人の耳に聞きなれぬは、小仏さゝ子の難処を越して猿橋のながれに眩めき、鶴瀬、駒飼見るほどの里もなきに、勝沼の町とても東京にての場末ぞかし、甲府は流石に大厦高樓、躑躅が崎の城跡など見る処のありとは言へど、汽車の便りよき頃にならば知らず、こと更の馬車腕車に一昼夜をゆられて、いざ恵林寺の桜見にといふ人はあるまじ、故郷なればこそ年々の夏休みに、人は箱根伊香保ともよふし立つる中を、我れのみ一人あし曳の山の甲斐に

峯のしら雲あとを消すこと左りとは是非もなければ、今歳この度みやこを離れて八王子に足をむける事これまでに覚えなき愁らさなり。

冒頭では山梨の名所や地名が描かれ、東京からの遠さを意識させた後、今まさに帰郷しようとする桂次の「これまでに覚えなき愁らさ」が焦点化されている。

例えば、近い時期に発表された「大つごもり」(明二七・一二『文学界』)や「にこりえ」(明二八・九『文芸倶楽部』)などの冒頭がそれぞれに工夫され、小説世界のトーンを決定する重要なものとなっていることを想起すれば、「ゆく雲」の冒頭も、一葉が両親の故郷を名所巡り風に辿ったというだけではなく、山梨に対する何らかの強い意識があったのではないか。そして焦点化される桂次に、この小説の重要な読みどころがあるのではないか。「ゆく雲」の一つの特徴として日清戦争との接点が見られることは、後に述べるようにこれまでも指摘されてきた。だが桂次に注目すれば、「ゆく雲」はさらに深く日清戦争に関わる小説として立ち現れてくるのではないだろうか。

山梨から上京し、日清戦争勝利のただなかで帰郷する桂次には、戦後の資本主義の発展を受け、富国強兵・殖産興業政策の中で富豪となり「国民」化されていく姿が予感されている。「ゆく雲」は、お縫と桂次という一組の男女のかなわぬ恋のなかに、日清戦争と

その後の日本の問題が垣間見える小説として読むことができる。

## 一

日清戦争は、明治二七年七月から二八年三月にかけておこなわれ、四月一七日に日清講和条約が調印される。帰国が決まった桂次は、「四月の十五日帰国に極まりて土産物など折柄日清の戦争画、大勝利の袋もの、(略)縁類廣ければとりくに香水、石鹸の気取りたるも買ふめり」と、「日清の戦争画」「大勝利の袋もの」を土産物として買いそろえる。「ゆく雲」が日清戦争に言及した小説であることは、この場面から、高良留美子氏や菅聡子氏等によって指摘されてきた。<sup>3)</sup>

ここでまず注目したいのは、「四月の十五日帰国に極まりて」という箇所である。帰国が四月一日ということとは、今の間に半年目、一年目、年始の状と暑中見舞の交際になりて」と、帰郷後桂次の心が遠ざかっていく様子を描くこの小説の時間が、初出時点を超える未来の時間を含んでいるということである。

「ゆく雲」の初出は、明治二八年五月五日の『太陽』第一巻第五号である。明治二八年三月二十九日に大橋乙羽の依頼を受け、四月上旬構想され、四月一日か一二日頃脱稿、一三日までには乙羽の元へ届けられていたのである。<sup>4)</sup>

この小説の時間が初出時点を超える事は、一葉の間違いや勘違いによって起きたことではないだろう。<sup>7)</sup>「四月の十五日」と限定して、四月一日か、一二日頃に脱稿した段階でそれに気付かないはずはない。「ゆく雲」には、日清戦争後の時代への予感が、描き込まれていると考えられるのである。

日清戦争終結以前から、雑誌等には戦勝後を想定した記事が盛んに掲載されていた。例えば「ゆく雲」が発表された『太陽』にも、様々に見る事が出来る。なかでも注目したいのは、戦勝後は経済面での戦争が始まるのであり、「国民」としての自覚を持たねばならないという説である。『太陽』をしばらく辿る。

『太陽』第一巻第一号(明二八・一)、千頭清臣「戦勝後の教育」(「三商事教育」では、次のように書かれている。

知るべし、今世紀の争は戦争の名誉其者に非ずして惟た利益其者なることを、故に欧州各国が互に其の戦備を競ふて殆ど底止する所無きも、畢竟すれば利益の衝突に基因するものにして(略)我帝国既に其間に伍す、亦自ら其用意無かるべからず、蓋し富国強兵といふも、誠に其国を富ますにあらざれば其兵強なる能はず、(略)余は即ち将来に於て我商事教育を拡張して以て之が富国の資たらしめんことを思はずんば非ず、日清戦争は「利益の衝突に基因」していると認識されており、また「強兵」のためにも「富国」が重要であると述べられている。

また、同号の井上辰九郎「経済的闘争」では、以下のように論じられている。

経済的闘争、換言せば農工商各般の産業に関する列国間の競争は、今や交通の途、交易の法益々開進するに従ひ、間断なく東西南北に亘りて益々熾烈に行はる、ものなり、(略)若し此際経済的闘争に於て敗を招くか如きことあらん歟、独り商業者其者の損失のみにあらず実に国民の恥辱にして所謂戦争に勝つも経済に敗るゝの冷笑を受けざるべからず、当業者たるもの亦武人と等しく須らく奮闘以て之に当るべし、(略)思ふに農工商の民は即ち兵士なり、農地、製造場、商業店の如きは即ち堡壘なり、(略)物産及び資金は即ち兵器なり彈藥なり又糧食なり、経済的闘争を試みるとす、此類の諸物先づ茲に具へざるべからず、

世界の経済競争が熾烈になっていることが指摘され、「農工商の民」もまた「兵士」となって闘うことが要求されている。さらに「農工商業に対して消極の方針よりは積極の方針を採るべし、自由放任の主義よりは保護干渉の主義を以て実業政策に関する国是となすべきこと是なり。」と書かれている。

そして、同号に掲載された中西牛郎「日本帝国の任務」には、「各個人民が国民としての職分を竭くすは、是れ国家の最大精神なり、各個人民が国民としての任務を負ふは、是れ国家の最大生命なり、」という言葉が見られる。「国民としての職分」を尽くし「国民とし

ての任務を負ふ」ことが求められているのである。

『太陽』第一巻第二号（明二八・一二）飯田旗郎「亜細亜の大商戦」でも、「帝国民が今回得たる大捷利は、帝国民の名譽と權利とを保全せしめ、且開国以来商業上大敗北の不名誉をも聊か償ひたるが如くなるは甚だ慶賀すべき事なるに付け、吾人は此大捷利と共に又商軍の大捷利をも期せざるべからず、亜細亜の大商戦に出で立つことを期せざるべからず」と、戦勝後の日本の経済発展が期待されている。さらに、次のように書かれている。

今日吾人が務むべき事は、（略）吾人自己の直接の利益に就きても大に画策する所なかるべからざるなり、則ち第一に吾人をして富裕ならしめ実力を有せしめ、強大ならしめざるべからず、富裕にして、強大にして、而して実力を備へてこそ、威力を得兵力を得權力を得、以て小朝鮮を庇護すべく、以て大清を抑制すべく、以て襲来コーカシア人を厭服すべし、

国家が世界の経済競争において打ち勝つために、国民それぞれが「富裕」に、「強大」になることが要求されているのである。

山梨県で発行され、一葉一家と関わりの深い野尻理作が主幹を務め、一葉も「経つくえ」（明二五・一〇・一八―二五）を掲載した『甲陽新報』にも、同様の記事が掲載されている。第六二九号（明二七・九・一二）「外交と経済」には、「戦争を以て単に干戈銃砲のみの争と為す勿れ、又実に外交及び経済上の争ひなり 軍陣に於

て勝つも、外交に於て屈し、経済に於て負けなば、以て完全の勝利と謂ふべからず、完全の勝利は軍陣及び外交経済総ての戦争に於て占むるに在り、」とある。また、第六五二号―第六五三号（明二七・一〇・一〇―一一）「戦争と農工商の關係に就て前田正名君の意見」では、「夫れ商工業の發達は多くは戦乱、飢饉、革命等の時に胚胎するを常とす左れば今や日清戦争の如き場合に於ては日本農工商業者が格段の決心を以て非常の力を竭くすべきの秋なり（略）此千載一遇の好機に乗じて（略）朝鮮半島国の利益を我商人中に掌握し東洋に雄視して貿易場裡の盟主となり其が霸王と為らんこと指顧の間に在りあ、夫れ今日の時ぞ」、「日本実業家たるもの何んぞ貿易場の血戦を試ろみ名譽ある義軍の下に斃る、の覚悟を為さる」と書かれている。山梨県にも、このような論調は広まっていたといえる。

桂次は、なぜ急いで故郷に呼び戻されるのだろうか。

養父清左衛門、去歲より何処开処からだに申分ありて寐つききつとの由は聞きしが、（略）先きの日故郷よりの便りに曰く、大旦那さまことその後の容体さしたる事は御座なく候へ共、次第に短氣のまさりて我意つよく、これ一つは年の故には御座候はんなれど、随分あたりの者御機げんの取りにくく、大心配を致すよし、私など古狸の身なれば兎角つくろひて一日二日と過し候へ共、筋のなきわからずやを仰せいだされ、足もとから鳥

の立つやうにお急きたてなさるには大閉口候、此中より頻に貴君様を御手もとへお呼び寄せなさり度、一日も早く家督相続あそばさせ、樂隠居なされ度おのぞみのよし、

ここに、日清戦争後という、経済上の大きな転換点を察知した養父の焦りを見ることは可能であろう。大きな商機が来るならば、それを逃さず家を発展させていくために、あるいは激しく動く時代の中で零落しないために、動けぬ自分に代わる若い力が必要である。そして自分がある間に、次の世代に様々な事柄を引き継いでおかねばならないという焦りが養父にあり、そのために桂次は至急帰らされたと考えられるのである。

ここで付け加えれば、「ゆく雲」は原稿依頼時には『文芸倶楽部』への掲載が予定されていたが、結局『太陽』に掲載される<sup>8)</sup>。

高良留美子氏は「おそらく大橋の判断で、この小説は『太陽』に発表された。大橋は『ゆく雲』に描かれた戦争に関わる景物に、読者をひきつける時事性を見出したにちがいない。」と述べている。「景物」のみならず内容面から見ても、『太陽』の読者を「ひきつける時事性」があるという判断が働いたのであろう。

## 二

山梨に帰郷し、定められていた許嫁お作と結婚した桂次の心が、次第にお縫から離れていく様子は次のように書かれている。

事なく高砂をうたひ納むれば、即ち新らしき一对の夫婦出来あがりて、やがては父とも言はるべき身なり、諸縁これより引かれて断ちがたき絆次第にふゆれば、一人一箇の野澤桂次ならず、運よくは万の身代十万に延して山梨県多額納税と銘うた人も斗りがたけれど、契りし詞はあとの湊に残して、舟は流れに随がひ人は世に引かれて、遠ざかりゆく事千里、二千里、(略)花ちりて青葉の頃までにお縫が手もとに文三通、こと細か成けるよし、五月雨軒ばに晴れまなく人恋しき折ふし、彼方よりも数々思ひ出の詞うれしく見つる、夫れも過ぎては月に一二度の便り、はじめは三四度も有りけるを後には一度の月あるを恨みしが、秋蚕のはきたてとかいへるに懸りしより、二月に一度、三月に一度、今の間に半年目、一年目、年始の状と暑中見舞の交際になりて、文言うるさしとならば端書にても事は足るべし、桂次の心が離れていく理由の一つに、「秋蚕のはきたてとかいへるに懸りしより」と、養蚕の忙しさが挙げられている。「ゆく雲」には、他にも養蚕・製糸業に関わる箇所がある。「桂次は東京に見てさへ醜るい方では無いに、大藤村の光る君帰郷といふ事にならば、機場の女が白粉のぬりかた思はれると此処にての取沙汰、」とあるように、「機場」という言葉が見られる<sup>11)</sup>。

桂次は「山梨の東郡」、「大藤村」の人で「人のうらやむ造酒家の大身上」の跡取りである。当時の富裕層であり、そのような家は酒

造業だけではなくいわゆる多角経営をしていた。明治二七年に刊行された『山梨鑑上巻』<sup>12</sup>「山梨繁昌明細記」から、東山梨郡の例を少し挙げる。松里村の武藤一作は酒造業・農蚕業、七里村の風間懷誓は酒造・質屋・養蚕業、神金村の田邊義信は酒造営業・糸繭商、日川村の蘆澤太兵衛は酒造業・質屋業・水車業・養蚕業・郵便切手売下所、等々力村の金丸傳四郎は質屋営業・清酒醸造・養蚕業・蚕種製造販売を、それぞれ兼業している。桂次の養家も、酒造業以外に養蚕業等にも力を注いでいたはずである。

ここで、当時の製糸業に目を向けてみたい。生糸は、富岡製糸場に代表されるように、日本の輸出を支え産業革命をもたらす最重要品目であった。玉川寛治氏<sup>13</sup>は、次のように述べている。

明治初期に、富国強兵をめざした絶対主義的天皇制は、殖産興業といわれる経済政策を展開した。それは、強力な陸海軍・警察と軍需工場を築きあげるために、製糸業と綿紡績業の育成・保護をもって開始された。殖産興業政策は、財政基礎の固まらない明治政府が、主として農民の負担によって強行したものである。その中で、蚕糸業の果たした役割は、他の産業と比べて、際だって大きかった。蚕糸業は、富国強兵を支える外貨獲得の役割を一九三〇年代末まで担い続けた。

製糸業は、富国強兵、殖産興業において最も重視されてきた産業である。そして山梨県は長野県に続く、あるいは並ぶ国内トップク

ラスの産地である。石井寛治氏<sup>14</sup>は、「信州」と「甲州」こそは、当時の器械製糸業の中心地であり、八八―九四年の七ヵ年平均で、横浜入荷生糸の約三分の一を占めていた地域である」と述べている。『山梨県史通史編5近現代1』<sup>15</sup>には、「明治六年（一八七三）一月に着任した藤村県令は、四月に「物産富殖ノ告諭」を発し、蚕糸業振興による山梨県の繁栄実現を県民に呼びかけ（略）、その中核施設・模範工場として山梨県勸業製糸場が創設され」、「官営富岡製糸場に次ぐ規模を誇」ったと記されている。

『塩山市史通史編下巻』<sup>16</sup>では、「塩山市域をふくむ甲府盆地東部の東郡地域での明治期以降の産業発展は、そのまま養蚕業や製糸業の発展といっても過言ではなからう。」と書かれている。そして、「塩山市域で器械製糸工場が多かったのは、七里、大藤の両村であり、これに松里村が続いている。」とあり、桂次の出身である大藤村が挙げられている。

『甲陽新報』には、毎日のように養蚕・生糸に関する記事が掲載されており、山梨県における蚕糸業の重要性が見て取れる。『甲陽新報』第二六四号（第二六七号（明二六・六・一四―一七）では、「我国蚕糸業家の覚悟」という記事があり、

現時我国富上最も勢力を有する者は何んぞと問ふ人あらば、余輩は一も二もなく蚕糸を以て答へざる可からず、見よ我国の輸出品中彼の製茶の如き、米穀の如き、其の他種々ありと雖ども

(略)、蚕系の右に出づる者はあらざるべし、要するに彼の蚕系の如き、年々歳々其の輸出を増進して、既でに三千五百万円の外に上り、現に我が総輸出額の三割八分、乃至四割を占む、と書かれている。山梨の蚕系業が、国の経済を支えているという誇りや覚悟があったのである。

一葉は渋谷三郎から再び求婚された際、日記「しのぶくさ」(明二五・九・一)に、次のように書いている。

さるを今かの人は雲なき空にのぼる旭日の如く実家ハ聞ゆる富豪のいよゝ盛大に成らんとするけしき 実姉ハ何某生系商の妻に成て此家又三百円の利潤ある頃といへり 身ハ新がたの検事として正八位に叙せられ月俸五十円の栄職にあるあり

「実姉」とは、渋谷三郎の姉にであり、生系商北島秀五郎に嫁いだ人物である。<sup>17)</sup>一葉は、山梨の蚕系業の発展とそれによって恩恵を受ける人々の裕福を肌身で感じていたのである。

日清戦争は、日本の産業を大きく発展させる。『日本貿易精覧』<sup>18)</sup>では、「我が国の経済は此の日清戦争を機会として未曾有の大発展期に入った。」と記されている。「貨物輸出入総額対照表」を見ると、明治二六年は輸出89,712,855円、輸入88,257,172円、明治二七年は輸出113,246,086円、輸入117,481,556円、明治二八年は輸出136,112,178円、輸入129,260,578円と、年々飛躍的に伸びている。

生系関連産業も大きく発展している。同書「輸出品表」で「生

糸」の合計金額を確認すると、明治二六年28,167,411円、二七年39,353,156円、二八年47,866,257円と上昇している。「絹織物」の合計金額では、明治二六年4,126,586円、二七年8,480,032円、二八年10,060,838円である。

石井寛治氏<sup>19)</sup>は、「日本生糸の輸出货量は、一九〇五年にイタリアの生産量を、〇九年に中国の輸出货量をそれぞれ凌駕し、日本は世界最大の生糸輸出国となった。」と述べている。

「ゆく雲」に戻る。「秋蚕のはきたてとかいへるに懸りしより」とあるように、桂次はこの殖産興業・富国強兵の波に乗って忙殺され、次第にお縫のことを忘れていくのである。

### 三

先に挙げた「ゆく雲」の一節を、もう一度見る。

事なく高砂をうたひ納むれば、(略) 諸縁これより引かれて断ちがたき絆次第にふゆれば、一人一箇の野澤桂次ならず、運よくば万の身代十万に延して山梨県多額納税と銘うたんも斗りがたけれど、

語り手は、桂次の将来を「万の身代十万に延して山梨県多額納税と銘うたんも斗りがたけれど」と、思い描いている。

この「山梨県多額納税者」という言葉から想起させられるのは、甲州財閥を築き上げた若尾逸平である。一葉は、日記「森のした舄



一」(明二四・一一)に、若尾逸平についてかなり詳細な記述を残している。<sup>20)</sup> その一部を引用する。

若尾逸平といふ人はかひの国山梨の郡にいとかすかなる商人などにや有けん 其土地にも暮しわびて江戸にのぼりてなりはひの道もとめんとて出で立ぬ(略)それより家道朝日の、ぼろがごと興り行きて甲府の本宅横濱の outlet とも大方人のめをおどろかすめり去年国会開設に際し山梨県下多額納税議員として撰出せられにたり 聞ならく江戸に志ざして出で立しは卅歳あまりの時成しとか

一葉は、若尾逸平の生き方に強い関心を抱いていたのである。

若尾は文政三年(一八二〇)に巨摩郡在家塚村(現南アルプス市)に生まれ、東京、横浜へ進出し、生糸・水晶の売込みで財をなし、山梨県の養蚕業界に地位を築く。そして、若尾両替商(後の若尾銀行)を開業、全国屈指の大地主となり、明治二年に初代甲府市長、翌三年には多額納税者として貴族院議員に選出されるのである。<sup>21)</sup>

若尾逸平は甲州財閥の中心人物となる。甲州財閥は、「若尾逸平・雨宮敬次郎・根津嘉一郎らと、それに続く小野金六・小池国三・古屋徳兵衛・堀内良平などの山梨県(甲州)出身の実業家たちが、明治中期から昭和戦前期にかけて形成した郷土意識と、緩やかな資本の連合による実業家集団の総称」である。<sup>22)</sup> やがてこの甲州財閥は東京を中心としながら、鉄道、電力、ガス、銀行等の重要な産業

を手中に収め、巨大財閥となっていくのである。「彼らの地縁連合的活動が注目されるようになるのは、東京市街の発展と人口増加による『乗り物と灯り』の需要拡大に着目した若尾が中心になり、明治二十五年にすでに当時としては大会社であった東京馬車鉄道、二十九年には東京電燈の株式を買い占め、乗っ取りに成功したときから」であった。<sup>23)</sup> 「ゆく雲」が書かれた頃には、一葉も甲州財閥に関心を持っていたのかもしれない。

当時の『甲陽新報』を見ると、若尾逸平の動向は常に記事になっている。一葉の「経つくえ」が掲載された第七八号・第八四号(明二五・一〇・一八・二五)にも頻繁に記されており、一葉も目にしてはいたはずである。若尾逸平は、たぐいまれなサクセスストーリーとして語られる、山梨を代表する名士であった。

東京に隣接しているという地理的特徴もあって、山梨には東京に出て成功しようとする青年達が大勢いたのである。一葉の父則義もまた、山梨の中萩原村の農民として生まれ、江戸に出て成功することを夢見、一旦は士族となった人物である。激動の時代に翻弄され波瀾の生涯を終えた父の姿と、出世街道を駆け上る若尾逸平とを重ね合わせることもあったであろう。

日清戦争は、資本家にますます富を集中させていく。石井寛治氏<sup>25)</sup>は、「日清戦争は日本経済をひとまわり大きくする画期となった。(略)財閥を頂点とするブルジョアジーの資本貯蓄はめざましく、旧大



名の華族上層の所得を上回る者がぞくぞくと現れた。」と指摘している。石井氏によって作成された表「東京・大阪・横浜の高額所得者」<sup>②</sup>によれば、一八八七（明二〇）年と一八九八（明三）年が比較されている。資本家を何人か見る。一位の岩崎久弥（一族合計値）は947,260円から1,213,935円、二位の三井八郎右衛門（一族合計値）は推定150,000円から657,038円、四位の住友吉左衛門は77,331円から220,758円、六位の安田善次郎（一族合計値）は40,220円から185,756円、そして三位の、甲州財閥の一人に挙げられる雨宮敏次郎は推定（多めの見積もり）20,000円から110,196円となっている。急速に、富の集中が起きていることが確認できる。

語り手が桂次の将来に「山梨県多額納税」という姿を描いてみせた背景には、山梨出身者が大きな財を得るというリアルなサクセスストーリーと、日清戦後資本家が富を蓄積して財閥を發展させ、日本は資本主義を完成させ富国強兵を進めていくという予感がある。

また「ゆく雲」では、東京山梨間の交通に目が向けられており、「汽車」「鉄道」という言葉が見られる。「躑躅が崎の城跡など見る処のありとは言へど、汽車の便りよき頃にならば知らず」、「又どれほどの御別れに成りますやら、夫れでも鉄道が通ふやうに成りましたら度々御出あそばして下さりませうか」、「八王子までは汽車の中をりればやがて馬車にゆられて、小仏の峠もほどなく越ゆれば」と、

やがて開通するであろう「汽車」「鉄道」が意識されているのである。

甲州財閥の人々は、東京山梨間の鉄道開通を推し進めた人々でもある。『山梨県史概説編山梨県のあゆみ』<sup>③</sup>には、「明治二十年前後に、（略）雨宮敏次郎が社長の甲武鉄道の八王子（東京都）―甲府間延長計画が企てられたが、山岳地帯を突破する膨大な工費が見込まれて、調査の段階で立ち消えになった。（略）明治二十四年十一月（略）鉄道期成同盟会が発足し、これには若尾逸平・根津嘉一郎・雨宮らも加わった」とある。そして、「路線位置決定の調査と日清戦争の影響で着工は手間取ったが、日清戦争後の第九議會（明治二十八・二十九年）で予算がつき、甲武鉄道に接続するかたちで工事が始まり、「明治三十六年六月、（略）遅れに遅れた中央線が甲府までようやく開通」したと書かれている。

一葉「経つくえ」が掲載されている『甲陽新報』第八二号（明治二五・一〇・二二）「院外運動の勢力」には、「思ふに我が県民中誰れか鉄道の速成を願はざる者あらん、亦た誰れか八王子路線の利益を知らざるものあらん、而して中央線路の運命免殆なるを聞き誰れか亦た憂慮せざる者あらん」とある。

林風氏<sup>④</sup>はこの記事について、「県内人の注目の焦点は一時中央線鉄道建設の期待に集中し、それを伝えた『甲陽新報』は主筆野尻理作の手により一葉の手元に郵送され、一葉はそれらの記事を読んだはずである。」と、指摘している。

「ゆく雲」には、甲州財閥の深い関わりによって東京山梨間に開通していく、山梨からの生糸輸送をも担う産業革命の象徴としての鉄道が描き込まれている。それは「ゆく雲」が産業革命、富国強兵について強く意識された小説でもあることを物語っているのである。

#### 四

自らの想いをほとんど語らず、何事にも諦念しているようなお縫に比べ、桂次は饒舌で熱しやすく冷めやすい人物のように見える。だが上京している間、彼のお縫への恋は「せめては傍近くに心ぞへをも為し、慰めにも為りてやり度」という、ひたむきなものであった。お縫に向かって桂次は言う。

我れは氣違ひか熱病か知らねども正氣のあなたなどが到底おもひも寄らぬ事を考へて、人しれず泣きつ笑ひつ、何処やらの人が子供の時うつした写真だといふあどけないのを貰つて、それを明けくれに出して見て、面と向つては言はれぬ事を並べて見たり、机の引出しへ叮嚀に仕舞つて見たり、うわ言をいつたり夢を見たり、

東京に出て「家」の重圧から一時自由になった桂次の、身を焦がす恋であった。帰郷すれば、養子である桂次はお作を妻に持ち「家」のために生きねばならない。

これを妻に持ちて山梨の東郡に蟄伏する身かと思へば人のうら

やむ造酒家の大身上は物のかずならず、よしや家督をうけつぎてからが親類縁者の干渉きびしければ、我が思ふ事に一銭の融通も叶ふまじく、いはゞ宝の藏の番人にて終るべき身の、氣に入らぬ妻までとは弥々の重荷なり、うき世に義理といふ柵みのなくば、藏を持ぬしに返し長途の重荷を人にゆづりて、我れは此東京を十年も二十年も今すこしも離れがたき思ひ、

彼は、お縫への想いを諦められずに苦しむ。「見すて、我れ今故郷にかへらば残れる身の心ばそさいかばかりなるべき、」とお縫の身を案じ、「俯甲斐ないものは養子の我れと、今更のやうに世の中のおちきなきを思」うのである。<sup>30)</sup>

桂次はお縫の前で、「そんな処に我れは括られて、面白くもない仕事に迫はれて、逢ひたい人には逢はれず、見たい土地はふみ難く、兀々として月日を送らねばならぬかと思に、氣のふさぐも道理とせめては貴嬢でもあはれんでくれ給へ」と、我が身を嘆く。そして自分を、「目に見えぬ縄につながれて引かれてゆくやうな我れ」と表現するのである。桂次は自由な恋を失い、「家」に縛られ財産を管理する「宝の藏の番人」とならざるを得ない。ここには、個人として解放されることを願いつつ挫折していく一人の青年の姿がある。

だが桂次は、「我れは世を終るまで君のもとへ文の便りをたゞざるべければ、君よりも十通に一度の返事を与へ給へ、睡りがたき秋の夜は胸に抱いてまぼろしの面影をも見ん」と約束する。帰路での

彼の心境は、「巴峽のさけびは聞えぬまでも、笛吹川の響きに夢むすび憂く、これにも腸はたゝるべき声あり」といふ、悲痛なものであった。

お縫は、「此時こんな場合にはかなき女心の引入られて、一生消えぬかなしき影を胸にきざむ人もあり」と語られ、桂次の言葉に心を動かされたことが暗示されている。お縫は、桂次の手紙を心待ちにする。「五月雨軒ばに晴れまなく人恋しき折ふし、彼方よりも数々思ひ出の詞うれしく見つる」とある。だが、手紙は途絶えていく。桂次はこれまで述べてきたように、経済の「兵士」となって忙殺されていくのである。

「ゆく雲」における男女の恋の不成立には、個人として解放されることを願いつつ、より強固になっていく「家」の論理から逃れられず挫折し、「世」の動きに押し流され、裕福で有望な「国民」となっていく一人の青年の姿があるのである。

お縫もまた、「家」の論理からその身が自由になることはない。冒頭で挙げた峯村至津子氏の指摘のように、お縫はすでに女大学的な価値観に沿って自らを「つくりあげて」いる。

此処なる冷やかのお縫も笑くぼを頬にうかべて世に立つ事はならぬか、相かはらず父様の御機嫌、母の気をはかりて、我身はない物にして上杉家の安穩をはかりぬれど。ほころびが切れてはむづかし

お縫はそのような「世」に置き去りにされ、「家」制度を打ち破ることのないまま、「ほころびが切れて」破綻をきたすのである。

## おわりに

桂次は日清戦争講和のただなか、故郷への帰路にある。だが、彼はお縫との叶わぬ恋に苦しみ寝られぬ夜を過ごす。その気持ちに偽りはなくとも、桂次は帰郷後時代の波に流されていくのである。

「ゆく雲」は、日清戦争後への予感を膨らませながら、桂次とお縫を隔てていく原因の一つとして養蚕の忙しさを描く。そこに、世界の熾烈な経済競争のなかで「兵士」となっていく桂次の姿を見ることが出来る。そして、彼の未来には「山梨県が多額納税」という富者の姿が思い描かれているのである。

一葉は初期作品で繰り返し悲恋を描いており、その原因が少しずつ変化を見せて探られている。<sup>31</sup>「ゆく雲」では、その悲恋の原因に、富国強兵、殖産興業という問題を見て、明治資本主義社会と「国民」の形成によって忘れられていく恋の約束を描いたのである。それはもはや、「暗夜」（明二七・七）―『文学界』のお蘭が波崎暗殺を企てたような熱情、そして個人を対象とした復讐ではどうにもならぬものであった。それ故に「ゆく雲」は、「隣の寺の観音様御手を膝に柔和の御相これも笑めるが如く、若いさかりの熱といふ物にあはれみ給へば」と、観音の「世」を諦念した視点を描くのであり、

また「世にたのまれぬを男心といふ」という、桂次を嘲笑するかの  
ような語りが生じているのである。

一葉は、日清戦争に対してあまり関心を示していないと見られる  
事が多い<sup>32</sup>。また小説においても、日清戦争に関連する言葉が記さ  
れているのは「ゆく雲」<sup>33</sup>だけで、それも小説世界に深く関るもの  
として読まれて来たとはいえない。だが、「ゆく雲」を桂次に注目し  
て読むとき、日清戦争終結によって変貌していく日本の経済状況や  
富者の繁栄を、一葉がいかにか鋭く認識していたかが見えてくるの  
である。

「大つこもり」で、お峯の伯父一家と山村家を対比させ、貧富の  
差の拡大を捉え、貧者の困窮と救済の夢を描いた一葉は、今度は「ゆ  
く雲」のなかに、諸外国との貿易戦争の「兵士」にさせられ、富者  
となって富国強兵に貢献していく者の、自由な恋愛の喪失と悲哀を  
描き込んだのである。

一葉は、経済戦争としての日清戦争を捉え、その後の日本への予  
感を「ゆく雲」に描いているのである。一葉が見つめていた世界は、  
さらに広く深いものであったといえる。

## 【注】

(1) 「樋口一葉『ゆく雲』試論―心のゆくえ―」(『淵叢』第一号、  
一九九二・三)

(2) 「縫うこと、結びること―一葉作「ゆく雲」の基層にあるイメージにつ  
いて―」(『女子大国文』第一三〇号、二〇〇一・一二)

(3) 「樋口一葉ゆく雲論―冷やか「なまなざし」―」(『日本文芸学』第三二号、  
一九九四・一二)で、「ゆく雲」を「たいへんわかりにくい作品である」  
と述べる。その原因として、「ゆく雲」が「二重の構造を有する作品で」  
あり、「表層には、桂次の演ずる悲しい別離と彼の心がわりという物語が  
あり、深層には、お縫の抱える孤独と虚無感が横たわっている。」ことを  
指摘する。そして、「上京青年と下宿の娘との恋」という点から桂次を論  
じつつも、結論としては「重要であるかの印象を受ける表層のドラマは、  
じつは、ほとんど意味のないものであった。」とする。

(4) 前田愛「大つこもり」の構造(『文学』第四二号、一九七四・五)は「大  
つこもり」の冒頭について、「金銭の量によって規定されている『大つこ  
もり』は、あらかじめ「量」と「物」の輪郭を鮮明に具えた世界として立  
ちあらわれ」といて、効果を指摘している。「にこりえ」も「おい木村  
さん信さん寄つてお出よ、お寄りといつたら寄つても宜いではないか、」  
と酌婦の威勢のよい声で始まることによって酌婦達の姿が前面に出され、  
その生が浮き彫りにされていく。

(5) 高良留美子「樋口一葉と女性作家 志・行動・愛」(『翰林書房』二〇一三・  
一二)、初出「樋口一葉『ゆく雲』と日記のなかの日清戦争」(新・フェミ  
ニズム批評の会編『明治女性文学論』翰林書房、二〇〇七・一二)、菅聡子「日  
清戦争という〈表象〉―一葉・鏡花のまなざしをめぐる―」(『文学批評  
紋説Ⅱ』第八号、二〇〇四・八)。また林嵐「樋口一葉『ゆく雲』の表現  
とその背景」(『芸術至上主義文芸』第二四号、一九九八・一二)にも論じ  
られている。

(6) 「樋口一葉全集第一巻」(筑摩書房、一九七四・七)「ゆく雲」補注、「樋  
口一葉事典」(前出)「ゆく雲」(一九九六・二、おうふう)等参照。

- (7) 林嵐「樋口一葉「ゆく雲」の表現とその背景」(前出)に、「右の一節からその年月を計算して見ると、野沢桂次がお縫と別れてから三年近く経っているのではないか。ここには小説の時間と現実の時間との間に一三年のずれが見える。それは作者の疏忽ではないと思う。」という指摘がある。
- (8) 『樋口一葉全集第一巻』(前出)「ゆく雲」補注に、「乙羽は、三月二十九日附の書簡で、『文芸倶楽部』のための短編の寄稿を依頼した」が、原稿が乙羽に送付された後「編集者の判断で、結局『太陽』に掲載された。」とある。
- (9) 高良留美子「樋口一葉と女性作家 志・行動・愛」(前出)
- (10) 『新日本古典文学大系明治編24樋口一葉』(岩波書店、二〇〇一・一〇)「ゆく雲」脚注に、「秋蚕」は、七月下旬から晩秋までに飼う蚕。「はきたて」は、養蚕で、卵からかえったばかりの蚕を蚕卵紙から掃き取って他の紙または蚕座へ移すこと。」とある。
- (11) 『新日本古典文学大系明治編24樋口一葉』(前出)「ゆく雲」脚注に「機織工場。山梨県は、養蚕・製糸業がさかんであった。「秋蚕のはきたて」と照応。」とある。
- (12) 『山梨鑑上巻』(明治二七・一一、原本発行。国書刊行会、一九八二・一〇)
- (13) 『製糸工女と富国強兵の時代 生糸がささえた日本資本主義』(新日本出版社、二〇〇二・一二)。さらに、「生糸や絹紡糸など蚕糸類が商品輸出総額に占める割合は、一八六八年の六・六％を最高にして、明治維新からの一〇年間の平均は五〇・五％、一八七七～八六年の平均は四二・八％、一八七七～九六年の平均は三六・九％、一八九七～一九二〇年の平均は、ほぼ三〇％の水準を維持していた。」と述べられている。
- (14) 『日本蚕糸業史分析』(東京大学出版会、一九七二・九)
- (15) 山梨県編『山梨県史通史編5近現代1』(山梨日日新聞社、二〇〇五・三)
- (16) 『塩山市史通史編下巻』(塩山市、一九九八・六)
- (17) 『樋口一葉全集第三巻(上)』(筑摩書房、一九七六・一二)脚注に指摘がある。
- (18) 東洋経済新報社編『日本貿易精覧(創立80周年記念復刻)』(東洋経済新報社、一九七五・五)。また『世界大百科事典21』平凡社、二〇〇九・七「日清戦争」【日清戦後経営】に、「農商務省も商工立国論を唱え、綿糸、生糸、茶などの輸出産業の振興策を打ち出した。」と書かれている。
- (19) 『日本の産業革命 日清・日露戦争から考える』(講談社学術文庫、二〇一二・一二)
- (20) 『新日本古典文学大系明治編24樋口一葉』(前出)「ゆく雲」補注「多額納税」にもこの記述について指摘されている。
- (21) 『山梨県史概説編山梨県のあゆみ』(山梨日日新聞社、二〇〇八・一)、『山梨県史通史編5近現代1』(前出)、内藤文治良『若尾逸平』(内藤文治良、大三・九)等参照。
- (22) 『山梨県史通史編5近現代1』(前出)
- (23) 『山梨県史概説編山梨県のあゆみ』(前出)
- (24) 第七八号「多額納税者諸氏若尾氏を招待す」若尾氏の告別宴会」、第八二号「若尾貴族院議員」、第八三号広告欄などに見られる。
- (25) 『シリーズ「日本近代史」10日本の産業化と財閥』(岩波ブックレット、一九九二・八)
- (26) 注(25)に同、表5。また、この表の元になっている石井寛治『日本経済史第2版』(東京大学出版会、一九九一・三)、表24「高額所得者一覧」では一八九五(明二八)年の値も記載されており、岩崎久弥1,084,437円、三井八郎右衛門586,621円、住友吉左衛門156,406円、安田善次郎83,627円、兩宮敬次郎83,380円となっている。
- (27) 『山梨県史概説編山梨県のあゆみ』(前出)
- (28) 『樋口一葉「ゆく雲」の表現とその背景』(前出)
- (29) 滝藤満義「ゆく雲」から「うつせみ」へ——一葉における小説の発想——

皆さんに感謝申し上げます。

『国語と国文学』第六七巻二〇号、一九九〇・一〇に「桂次は少々軽薄で、熟しやすくさめやすい青年として設定されている。」とある。

(30) 金命姫「樋口一葉『ゆく雲』論——心かよは「ない文」——」『語文』第九八号、

二〇一・二・六は、桂次が養子であることに注目し、桂次は「お縫のもとを離れていくしかないのである。その「愁らさ」が作品の冒頭から示されている」と述べている。また、セン・ラージ・ラキ「ゆく雲」「うつせみ」

「われから」における「婿／養子」法・制度——「一人娘」たちの「煩悶」——『文学・語学』第二一三号、二〇一五・八に、「婿／養子」として養家

に戻ることは、桂次にとって葛藤の原因でもあるが、同時に、経済的側面から階級的な移動をもたらす最良の選択であった。」と指摘されている。

(31) 拙著『樋口一葉と斎藤緑雨——共振するふたつの世界』(笠間書院、二〇一・一・六)で論じたことがある。

(32) 穴澤清次郎「一葉さん」(『一葉全集』第二回配本付録月報「一葉」第二号、筑摩書房、一九五三・九)に、日清戦争の頃、穴澤清次郎の質問に「一葉が

「われわれ仲間では、少しも戦争なんて影響されませんね」と答えたこと伝えられている。この事からも一葉は日清戦争にあまり関心を示していないとされることが多い。

(33) 菅聡子「日清戦争という〈表象〉——一葉・鏡花のまなざしをめぐって」(前出)に、「ゆく雲」は、「一葉作品のなかでは唯一、直接日清戦争に言及したものである。」と指摘されている。

※付記 樋口一葉のテキストは、『樋口一葉全集』第一巻〜第三巻(下)(筑摩書房、一九七四・三〜一九七八・一一)を使用し、原則として旧字体は新字体に改めルビ等は省略した。

なお、本稿は二〇一六年度甲南大学文学部日本語日文学科「演習Ⅱ」のゼミで「ゆく雲」の注釈研究を行うなかで想を得た。受講生の

——つかもと・あきこ、甲南大学教授——